

第2部

研究に寄せて

明治初期の石川県における女性教員に関する研究
— 鳳至郡女性教員若島杖の日記（1878—1879）の分析を中心に —

The study of female teachers in Ishikawa during the early Meiji era
— By analyzing the diary (1878—1879) by Tsue Wakashima as a female teacher in
Fugeshi zone —

中田 幸江

教育学研究科教育実践高度化専攻
カリキュラム研究コース 保健体育分野
主任指導教員 大久保 英哲 教授

序章

本研究の目的は、石川県女性教員のパイオニアの一人若島杖という人物及び彼女の残した「日記」に着目し、明治初期の石川県の女性教員がどのような歴史的・社会的背景から生み出されたのか、当時の女性教員がどのような生活をしていたのかを明らかにすることである。

第1章 石川県鳳至郡における近代初等教育制度の成立と展開

明治初期各地方の多くは、江戸幕末期の教育制度を母体としながら、近代教育制度を成立・展開していくが、石川県は全国に先駆けてその制度を整備した。

鳳至郡では、県施策を受け、小学校開設が進むとともに、住民の教育に対する理解や熱意によって、近代初等教育は普及していった。

第2章 明治初期の石川県における女性教員の要請と展開

近代初等教育制度の普及には、まず教員を養成することが最も重要な課題であった。

石川県は、明治8（1875）年に石川県女子師範学校を設立し、全国的にみて最も早い段階から女性教員養成に取り組み始めた。しかし、当時の女性教員に対する社会的評価の低さや女性自身の教育に対する自覚の乏しさなどの理由から石川県女子師範学校の卒業生は明治9（1876）年から明治15（1882）年の7年間で40名という少なさで、女性教員の養成はなかなか進まなかった。

第3章 鳳至郡女性教員若島杖と若島杖の「日記」

1. 若島杖と若島杖の家族

若島杖は鳳至郡における女子教育のパイオニアであるが、師範学校を卒業しないで近代学校の教員となったと考えられる。杖は文政12（1829）年7月17日に現輪島市に生まれ、幕末頃から自宅にて私塾を開き、女兒を教授していた。その後、明治8（1875）年には鳳至郡における女子教育の嚆矢である錦繡小学校に勤務し、明治10（1877）年から明治12（1879）年まで宅田啓沃小学校に勤務する。このような私塾の師匠から小学校教員への転身は、明治初期における全国的な動向と一致していた。

2. 若島杖の日記の「日記」について

「日記」は和綴じで縦16.7cm×横11.8cmの大きさであり、和紙1ページには10行の罫線がある。150頁にわたって丹年に文字が書きこまれている。宅田啓沃小学校の教員時代、明治11（1878）年12月から明治12（1879）年9月まで杖が断続的に書いた「日記」は、明治初期の女性教員が残した最も古い日記の一つと考えることができる。天候、日常生活、来客、食事内容、金銭出納、自身の病状などの個人的な生活記録が主であるが、杖の勤務した日や給料、同僚とのやりとり、教育会についての記述なども記されており、明治初期の女性教員の生活及び日常生活を知る上で、史料的价值が極めて高い。



図1 若島杖の「日記」の表紙

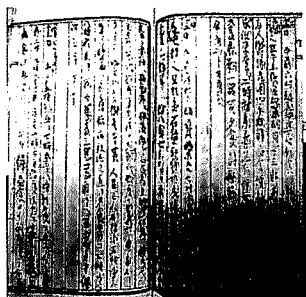


図2 若島杖の「日記」の一部

第4章 女性教員若島杖の生活

1. 教員としての生活

記述の上では、杖は一ヶ月に平均10日勤務している。それは石川県の女性教員、「女教師補助 高木柳」の明治12（1879）年1月の勤務日数7日と比較してみても同じくらいであり、当時の勤務実態を物語るものと見ることもできるかもしれない。また、「教師補」としての杖の給料は三円だった。杖は、しばしば懇意にしていた人物や寺から2～10円の借金と返済を繰り返す生活を送っており、極めて薄給だったことがわかる。「日記」には学校における教育や子どもたちについての記録はほとんど見られないが、明治12（1879）年に結成された鳳至郡の教育会と見られる「旭光会」に関する記述を残している。この記述から、杖が旭光会という鳳至郡の教育会と考えられる会に強い関心を抱いていたこと、自らの裁量で教育の目的及び内容、教授方法などを決定していた私塾の師匠から国の施策に拠って働く教員へと意識が移り変わっていった姿を見ることができる。

2. 日常生活

「日記」からは、食事に関して次のことが窺えた。杖は、朝食、昼食、夕食と一日三回、食事をすることを習慣としていた。ただ、食事内容は、麦飯、白カユ、小豆カユ、葱カユなどが多く質素であった。また、鰯煮付、鰯炙物、鰯煮付ワカメ加など海に面している鳳至郡の海産物を利用した食事内容であったことも窺えた。

「日記」からは、杖は持病を抱えていたと考えられ、下血することが多く、最も多い5月には17日も下血している。そのうち7日出勤しており、杖が病を抱えながらも出勤していたことも窺える。

結章

近代初等教育制度の普及には、まず教員を確保することが最も重要な課題であった。全国的にみて最も早い段階から石川県は教員養成に取り組み始めたが、女子師範学校の実際の卒業生は明治9（1876）

年から明治15（1882）の7年間で40名という少なさだった。そのような時代に鳳至郡における女子教育のパイオニアとなった若島杖は、師範学校の卒業生ではなかったと推測でき、幕末期から鳳至郡の私塾で女兒を教授していた人物であった。このような私塾の師匠から小学校の教員への転身は、学制の公布によって、多くの寺子屋の師匠が教員となった明治初期の全国的動向と一致していた。また、若島杖の平均勤務日数は一カ月10日だったこと、杖は旭光会という鳳至郡の教育会と考えられる会に強い関心を抱いていたこと、杖の給料が当時の教員の中では薄給であったこと、教育に関する記述はあまり見られないことが明らかになった。

引用参考文献

- ・石川県教育委員会、石川県教育史第1巻、1974
- ・鳳至郡市役所編、石川県鳳至郡誌、臨川書店、1985
- ・村口一雄、金沢市教育史稿、第一書房、1982
- ・唐澤富太郎、教師の歴史、創文社、1955
- ・坂本清泉・坂本智恵子、近代女子教育の成立と女紅場、あゆみ出版、1983
- ・石月静恵、近代日本女性史講義、世界思想社、2007
- ・文部省、学制百年史、1972
- ・文部省、学制百年史 資料編、1972
- ・日本近代教育史事典編集委員会、日本近代教育史事典、平凡社、1971
- ・陣内靖彦、日本の教員社会 歴史社会学の視野、東洋館出版社、1988
- ・中内敏夫・川合章、日本の教師4 女教師の生き方、啓文堂、1974
- ・唐澤富太郎、日本の近代化と教育、第一法規、1976
- ・北国新聞社、能登のくに一半島の風土と歴史一、2003
- ・村上信彦、明治女性史 上巻、理論社、1971
- ・村上信彦、明治女性史 中巻後期、理論社、1971
- ・大久保英哲 明治期比較地方体育史研究—明治期における石川・岩手県の体操科導入過程—、不昧堂、1998
- ・文部省第三年報 明治八年第一冊
- ・同上書、第二冊
- ・文部省第四年報 明治九年第一冊
- ・同上書、第二冊
- ・文部省第五年報 明治十年第一冊
- ・同上書、第二冊
- ・文部省第六年報 明治十一年
- ・金沢大学教育学部附属幼稚園、ゆめにむかって120周年記念誌、2007
- ・輪島市史編纂専門委員会、輪島市史、北国出版社、1976
- ・輪島市史編纂専門委員会、輪島市史 資料編第四巻近世町方海運・近現代、1975
- ・若林喜三郎、輪島町史、新興出版社、1984